

『“オーシャン” —アメリカにおける浄土真宗入門』*1

*1 : ケネス・田中著 哲学博士(仏教学 Ph.D.) 日系3世。武蔵野大学教授
島津恵正訳(仏教学修士)、(株)法蔵館発行(2003年)

1. 親鸞聖人について

1) 生涯(ホームページより補充)

1173年: 誕生(京都・日野) 幼名: 松若丸。4歳: 父と死別、8歳: 母と死別。

1181年: 9歳 比叡山に入山、出家、得度。

1191年: 19歳 磯長の太子廟へ参籠(3日間)され、聖徳太子の夢告を受けられる。

「お前の命はあと10年、その時速やかに浄らかなところへ行く。今こそ菩薩を信じよ。」

1201年: 29歳 比叡山からの下山を決意。京都・六角堂参籠、夢告を受ける。法然に弟子入り。

「たとい女犯があっても私(救世観音)が肉体の交わりを受けよう。死に際して極楽に生じさせよう。この文は私の誓願である。一切の人々に説き聞かせなさい。」信心を決定。

1203年: 31歳 恵信尼と結婚、肉食妻帯を決行。

1205年: 33歳 法然に「選択本願念仏集」書写を許される(継承者の証)。

1207年: 35歳 戒律を破り、国家騒乱のため流罪(法然: 土佐、親鸞: 越後)

1211年: 39歳 流罪を赦免。関東地方へ旅立ち。

1212年: 40歳 法然上人往生。

1214年: 42歳 関東地方に在住して、庶民に布教。

1224年: 52歳 『教行信証』執筆を終える。

1231年: 59歳 自立の執心について反省を深め(報いきれない仏恩に苦しまれ)高熱で寝込む。

1234年: 62歳 帰京し、執筆に専念。

1256年: 84歳 長子・善鸞の関東での不審な言動が明らかとなり、義絶する。

1262年: 90歳 親鸞聖人往生(11月28日)。

2) “親鸞”一名前の由来*2と教え『教行信証』(要旨版『正信偈』)

*2 (補充資料): 野々村智剣; 『正信偈もの知り帳』(法蔵館、平成6年初版)

和田真雄; 『楽しくわかる正信偈』(法蔵館、平成3年初版)

<親鸞聖人が選んだ七高僧> 親鸞聖人がお念仏をいただけるに至った7人の高僧
龍樹菩薩(インド、2~3世紀) 大乘仏教の生みの親。悟りに至る難行道と易行道を示した。
天親菩薩(インド、4~5世紀) 阿弥陀如来に帰命して救われる浄土論を説かれた。

(または世親菩薩)

曇鸞大師(中国、476~542年) 天親菩薩の浄土論を中国に広めら、中国・浄土教を開かれた。

道綽禪師(中国、562~645年) 曇鸞大師の浄土教を継ぎ広く念仏をすすめられた。

善導大師(中国、613~681年) 道綽禪師の教えを受け浄土教を大成された。

源信和尚(日本、942~1017年) 阿弥陀仏の本願念仏を説かれた。「極重悪人唯称仏」を唱えた。

(または恵心僧都)

源空上人(日本、1133~1212年) 日本・浄土教の開祖。他力専修念仏の道を説く。

(または法然上人)

他力念仏を親鸞聖人に伝えた法然上人は、源信和尚の『往生要集』を通じて、中国の善導大師の『観経疏』を読まれ、お念仏の世界へ導かれた。

善導大師は、道綽禪師のもとで直接学ばれている。道綽禪師は、第3祖の曇鸞大師の功績をたたえた石碑を読まれて感動を受け、浄土往生の道に入られた。曇鸞大師は、天親菩薩の『浄土論』（往生論）を竜樹菩薩の考え方によって解説（『往生論註』）された。天親菩薩と龍樹菩薩は、お釈迦様が説かれた阿弥陀如来の教えを明らかにされたお方である。

親鸞聖人は、曇鸞大師の『往生論註』の教学に開頭された時に、天親菩薩と曇鸞大師から一文字づついただかれて“親鸞”と名乗るようになられたと伝えられている。

<『正信偈』>

第7世存如上人によって『正信念仏偈』（『正信偈』）として『教行信証』から浄土真宗の教えの要点がまとめられ、第8世蓮如上人によって印刷され、日常の勤行に門徒に広められた。

『正信偈』の内容は、前半（依経段）と後半（依釈段）に分けてまとめられている。

前半は、阿弥陀如来仏の御教えに関する“弥陀章”とお釈迦様のおすすめにに関する“釈迦章”で構成されており、『大無量寿経』にもとづいて阿弥陀如来への絶対帰依が説かれているから「依経段」といわれている。

後半は、インド、中国、日本の七高僧（上記）の「論」や「経典解釈」についてまとめられているので「依釈段」といわれている。

このように、『正信偈』には阿弥陀仏から法然上人までの教えの要点が順序良くまとまって説かれている。

2. “信心”について

1) 親鸞聖人の“信心”

1201年（親鸞聖人29歳）、京都・六角堂（聖徳太子建立）で夢告を受け、法然上人に弟子入りした時、この世で、「人間あるがままの姿で、絶対の救いを得られる」ということにめざめ、信心した。

2) “信心”とは

- ・“めざめ” — この世で実現可能な深い意識の転換—理解、智慧、覚醒を伴う心のひろがり
- 個人の実存的な判断に基づいて真理そのものに従う（釈尊「自灯明、法灯明」）
- 全ての仏が到達した完全なる悟りが約束されている（「不退転の位」）
- 真に心が安んじる

3) “めざめ”の事例 — 海（オーシャン）

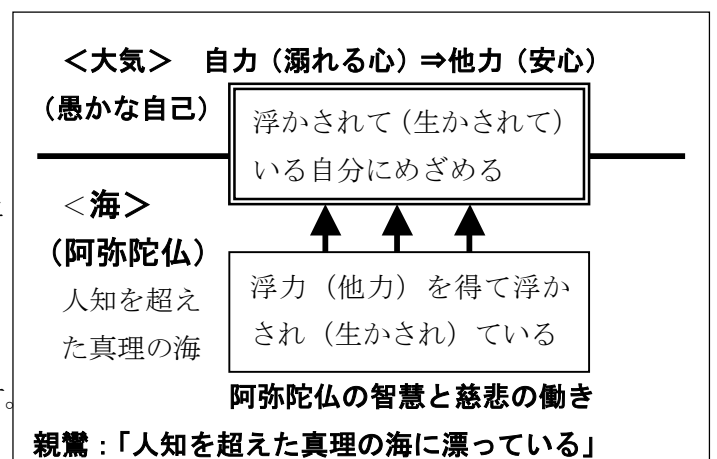
今、1人の船乗りが海に放り出され、泳いでいることを想定する。

大海の真っ只中をその人はどこかの島へたどり着くべく必死に泳ぐが、その方向感覚も無く、力も尽きようとして絶望の中にいる。

その時、海の深淵から「力を抜きなさい。力むのをやめなさい。そのままいいのです。南無阿弥陀仏」と声が聞こえてきた。

その人は、自分の力でむやみに泳ぐことを止め、仰向けになると力まなくても海が自分を支えてくれることを知って安心した。「本当は、初めからずっと大丈夫だった」のだが、自分の力に頼りすぎて自分を見失っていたことにめざめた。

それから、空の星の位置から自分の位置を確かめ、方向を定めて、風向きを計算しながら島のある方向に気を持ち直して（大きく意識を変えて）泳いでいったと・・・。



4) “阿弥陀仏”について

サンスクリット語	複合語
アマターバ (無限の光、智慧) ⇒ 日々のめざめ ⇒	阿弥陀仏 (無限の智慧と慈悲)
アマターユス (無限の命、慈悲) ⇒ 日々の慈悲 ⇒	

“阿弥陀仏”とは、形なき“一如”^{*3} (日常概念を超えた究極的な力) を形として表したもの

- ・ 日々のめざめ：日々の生活の中で多くの慈悲を味わう「手助けをしてくれるもの」^{*3}
^{*3}：“聞法”の過程では、周りにある日々の慈悲に、より目を見開くように促される。
- ・ 日々の慈悲：私の命を生み出し、育み、支える「命を与えてくれるもの」^{*4}
^{*4}：“他力”とは、“阿弥陀仏の慈悲”のはたらきの別名。

5) “苦悩の解決”について

仏教が解決する“苦悩”とは、社会的や経済的なことより、実存的な（個別者として自己の存在、経験を重視した）苦悩を対象とする。

仏教の教えの立場：

- ・ 仏陀は、人々が苦悩を克服するのを助けるために教えを説かれた。
- ・ 悟りに伴う智慧が生まれれば、苦悩は生まれない。
- ・ 仏教は、矛盾の現実を生き抜く智慧となる。無知を取り除くことで、残りの連鎖反応は起こらなくなり苦しまなくてすむ。
- ・ 現実にはありもしない苦しみを作り出しているのは自分自身であり、それは自分自身の妄想や幻想である。
- ・ 四苦八苦” = “四苦” (生、老、病、死) + “四苦”
 $[4 \times 9 + 8 \times 9 \Rightarrow 108(\text{人間の煩悩の数})]$

愛別離苦：愛するものとの別離
 怨憎会苦：嫌いな者との交際
 求不得苦：欲しいものが手に入らない
 五陰盛苦：全てが“苦”に他ならない

仏教の生き方の基本原理：

「仏教の教え」苦悩は出発点にすぎず、ゴールは悟りである

＜四諦＞無知が苦悩の源

1. 苦諦 (くたい：苦しみ)：全ての人々は苦悩を経験する
2. 集諦 (じったい：原因)：苦は、貪り、怒り、無知 (ぐち) の三毒に由来する
3. 滅諦 (めつたい：悟り)：苦悩の終わりは悟り
4. 道諦 (どうたい：方法)：悟りへの方法は八正道

悟りへの方法 = <八正道> 悟りに伴う智慧があれば苦悩はない

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1) 正見 (しょうけん)： | <u>健全なものの見方</u> |
| 2) 正思惟 (しょうしゆい)： | 健全な考え方 |
| 3) 正語 (しょうご)： | 健全な話し方 |
| 4) 正業 (しょうごう)： | 健全な行為 |
| 5) 正命 (しょうみょう)： | 健全な暮らし |
| 6) 正精進 (しょうしょうじん)： | 健全な努力 |
| 7) 正念 (しょうねん)： | 健全な心の保ち方 |
| 8) 正定 (しょうじょう)： | 健全な瞑想 |

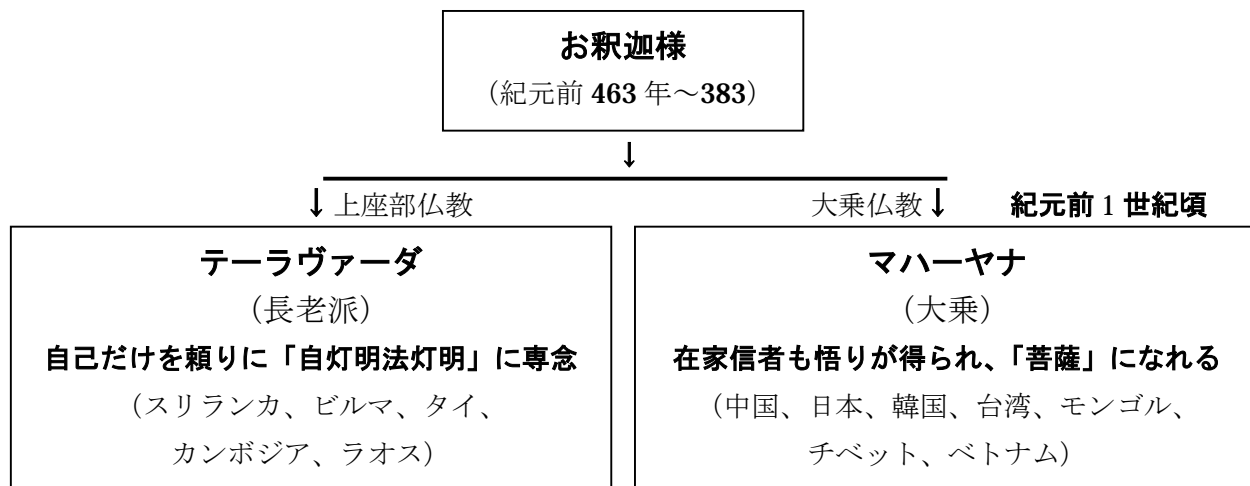
健全なものの見方 = <四法印> 何を変え、活かすかの判断基準

- ①一切皆苦：人生は四苦八苦⇒悟りを開き仏になる足がかり
- ②諸行無常：人生は無常⇒全ての瞬間は生命の開花、次もある
- ③諸法無我：人生は縁起⇒お互い「お陰様」と味わって生きる
- ④涅槃寂靜：人生は根本的に良いものである⇒苦難、喜びあり

3. “浄土真宗”について*5

*5 (補充) : 浄土真宗教学研究センターホームページ <http://www2.hongwanji.or.jp/kyogaku/>

1) 仏教の歴史



2) 浄土真宗の歴史

- ・宗祖：見真大師親鸞聖人 (1173～1262 年)
- ・ ：覚信尼 (親鸞聖人末娘：1224～1283 年)
京都・大谷に廟を建立、本願寺を名乗った
無名に近かった親鸞聖人の教えを伝えた
- ・3代：覚如 (覚信尼の孫：1270～1351 年)
長子相続制度導入

↓

- ・8代：蓮如 (1415～1499 年)
中興の祖、第 2 の開祖 (日本国内で最も高名な教団に築き上げた)

↓

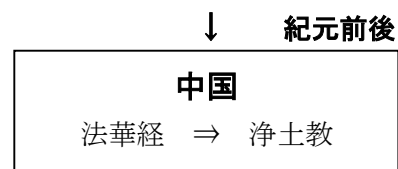
- ・11代：顕如 (1543～1592 年)
浄土真宗東西分裂。教如 (長男：東本願寺創設、宗主) と支持者が、信長の石山本願寺退去命令に应ぜず、准如 (三男) を後継に指名、本願寺 (西本願寺) を京都に移転

↓

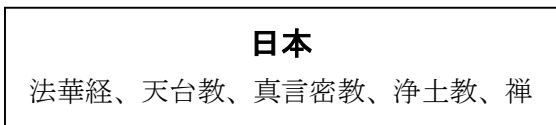
- ・24代：即如 (1945～)
- ・ ：専如 (1977～)

3) 浄土真宗の教章

- ・宗名：浄土真宗本願寺派 (西本願寺)
- ・宗祖：見真大師親鸞聖人 (1173～1262 年)
- ・本尊：阿弥陀如来 (南無阿弥陀仏)
- ・經典：浄土三部経 [仏説無量寿経 (大経)、仏説観無量寿経 (観経)、仏説阿弥陀経 (小経)]
- ・教義：南無阿弥陀仏の教えを信じ、必ず仏にならせていただく身の幸せを喜び、常に報恩の
思いから世の中のため人のために生きる。
- ・宗風：宗門は同信の喜びに結ばれた人々の同胞教団であって、信者は常に言行をつつしみ、
人道世法を守り、力をあわせて、広く世の中にまことのみ法をひろめるように努める。



朝鮮 (372 年頃) ⇒ ↓ ⇒ 日本 (538 年頃)



また、深く因果の道理をわきまえて、現世祈祷やまじないを行わず、占いなどの迷信に頼らない。

4) 浄土真宗の“行”

(1) 聞法 (もんぼう)

浄土真宗では、死後ではなく、この世で“信心”という“めざめ”を経験し、日常生活の中でその経験を重ねていくうちに悟りに至る道を説いている。

善知識 (師) のお説教を真剣に聞く。仏教の理想を内面化する。内面化によって日々の生活の中で教えを実践化する。

(2) 読経 (どきょう)

「自ら信心にめざめ、他の人に信心を伝える」(善導大師「自信教人信」親鸞聖人七高僧の一人)を指針として、経典にあるお釈迦様の言葉や親鸞聖人の言葉を唱える(斉唱する)。

お釈迦様は、自分自身の理解からその求道を始められ、道元禅師(曹洞宗開祖)には、「仏法を知ることは自己を知ることなり」と説かれた有名な教えがある。

4. 哲学と宗教

	哲 学	宗 教
理 性	・ 人間の理性の産物 ・ 理性に対する信頼の上に築かれる	・ 人間の理性に絶望する所から出発する
真 理	・ 理性によって把握される	・ 理性や感情やその他のものを含んだ「私」という全人格の上に実践的に把握されるものである

・ 宗教は、自己自身の生き方に対する問いかけが基本となっており、道徳でもなく、死者のためでもない。

5. “仏”と“神”の相違

	浄土真宗	キリスト教
絶対者	他力	神の恩寵
	自己を超えた力に頼る	
人間性	愚か者	罪深い者
	人間は自己中心的で、自らの努力だけでは変えられない	
同一性	人間は仏になる (無限の智慧と慈悲) 仏の智慧にめざめた自己認識	人間は神にはなれない (超自然的存在、創造神) 神との契約、破れば罪

・ アメリカでは、自分の宗教見解をはっきりと他の宗教の人に説明しなければならない必要に迫られる。従って、自分の宗教を大事にする習慣がある。

・ 仏教では、その悟りを開いた存在として、この濁世に即座に帰って来て衆生を悟りに導く連綿たる一如の働きに加わる。この点においてキリスト教と異なる。

・ 親鸞聖人は、念仏「南無阿弥陀仏」に重点を置き、念仏を阿弥陀仏そのものと考えられた。蓮如上人は、ご本尊として、①「無限の智慧と慈悲」の象徴である「南無阿弥陀仏」と漢字で書かれた名号が最も望ましく、続いて、②巻物に描かれた阿弥陀仏の仏画(立像)、③人間の形をした阿弥陀仏像(立像)の順を示された。

以上